

# 襦袢着型（一部式）刺子資料の分析

- 国立民族学博物館収蔵標本による(3) -

山崎光子

Analysis of *Juban Sashiko*

Specimens in the National Museum of Ethnology (3)

Mitsuko Yamazaki

前報では、農作業着型（二部式）刺子資料について報告したが<sup>1)</sup>、引きつづき本報では、襦袢着型（一部式）刺子資料の分析の結果を報告する。なおここでは同時採集され、それぞれ一括して購入された野良着5点と、家着風刺子2点の2種類に大きくわかれる。後者には長着型一部式刺子1点も含むが、両者を同時にあつかう必要から本報に含めた。

## 研究方法

研究方法は前々報と同様の主旨から<sup>2)</sup>、下記のような、すでに定めた分析方法<sup>3)</sup>に準じて行なった。ただし野良着5点については、同一形式の記述の反覆をさけるため、特に分析結果を表示する方法をとった。

### 1. 資料の情報

資料の概要

採集地、採集時期、採集者、名称（呼称）等について

### 2. 資料の分析

#### a. 形状の状況（写真・図）

#### b. 材料

(1) 織布の材質と色、織・染柄（図）

(2) 縫い糸の材質と色、刺子模様（図）とその意匠構成（図）

#### c. 縫い方と裁ち方

(1) 縫い方の状態、縫い代の様子（図）

(2) 裁ち方の推定（図）

## 結果と考察

資料1, 2, 3, 4, 5（品名）野良着

（標本番号）32039, 32040, 32041, 32042, 32043,

（衣服G-2-15（5点とも））

この5点の資料は、京都の業者から一括して購入したもので、採集時期等の記録はない。しかし、刺し方や刺しのない袖など、これまでの刺子と異なる特長をもっている。京都府立資料館の福田栄治氏（民博の共同

研究員）によれば、この刺子は丹波を中心として、若狭、丹後、因幡までの範囲の地域のものではないか、さらにそこで緋を用いた時期は大正末期から昭和10年頃までであろうという。この形態のものは漁師も用いるということであるが、本資料は、大きさや意匠構成からみて婦人用ではないかと思われる。いずれも身丈、桁丈ともほぼ同一で、やや丈長のものもあげをして丈をそろえてあり、同一人によって着用されたものかもしれない。

刺し方にも特徴があり、表は小針であるが、裏に大針の縫い目を縦にびっしりと朱子織りのように刺してあるが、やはり同じ人によって刺し、仕立てられたものであろう。

いずれも布配りが新鮮で、素材も型染風の緋や型染が種々用いられているが、実際は古い布きれを丹念にはぎ合わせては刺し縫いしており、着用後にも破れたり、すり切れたところには厚い布をあてて刺してあり、愛着をもって長年着用されたことがわかる。

#### a. 形状

形状はほぼ同型であるが、かけ衿型と本衿襦袢型がある。袖もやや小さめの巻袖である。資料4だけは舟底型の袖で袖口をしばって洋服のようにタックをとり、カフス状にへりとり布をつけており、袖つけに若干の無理がかかるためか、左袖つけの下側がほつれていた。

よくみると普通の刺子衣とはかなり異なる特徴がみられる。それは袖に刺子が全くなく衿仕立であること、先に類例はあったが、刺子の裾の始末がへりとり布でないこと（資料5を除く）である。また、前（後）身頃上半部に別布を配する例も多い。

衿にはいずれも掛け衿があるが、掛け替えたものらしく比較的新しい。身頃は、よく着古してあるため厚いわりには手ざわりがやわらかい。

#### b. 材質

(1) 織布の素材と柄、染め色

素材は大半、平織りの木綿布である。かなり企業化

された緋技術や染め技術による市販品の布を用いて、裏布には手織りらしい布もみえる。それらの糸密度は、資料2, 3, 4には朱子織りの衿がついている。〔表1〕に示した。布の厚さや重さも同表にまとめた。

表1 糸密度と布の厚さ、総重量

資料番号 (標本番号)			3-1 (32039)	3-2 (32040)	3-3 (32041)	3-4 (32042)	3-5 (32043)
糸 密度 (本/cm)	身頃	経緯	32	22	22	25	22
		緯	27	20	21	22	17, 25
	袖	経緯	19	19	21	24	22
		緯	17	20	18	22	23
衿	経緯	22	朱子織	朱子織	朱子織	22	
	緯	23					
裏布		経緯	28	26	20	16	18
		緯	22	26	19	12	14
布の 厚さ (mm)	身頃		2.57	1.55	1.68	1.62	2.55
	袖		0.78	0.95	0.82	0.65	0.74
	衿		6.82	4.31	2.33	5.57	7.70
布の 枚数	身頃		5	上3, 下2	上3, 下2	上3, 下2	上4, 下2
	袖		3	2	2	2	2
布の重さ(g)			1,562	758	820	930	955
布幅 (cm)	表		34.5	34.5	35	33.5	33
	裏		32	32.5	33.8	32	32

表2 素材の柄模様と染め色

資料番号 (標本番号)				3-1 (32039)	3-2 (32040)	3-3 (32041)	3-4 (32042)	3-5 (32043)
表	布の 柄	身頃	上部	タテヨコ 小 緋	タテヨコ 中 緋	タテヨコ # 中緋	タテヨコ 小 緋	タテヨコ 中 緋
			下部	各種中緋		七宝つな ぎ中緋		草花模様 ヨコ緋
布	布の 色	袖		菱形模様 型 染	タテヨコ 中 緋	タテヨコ # 中緋	タテヨコ 小 緋	黒無地
				にぶ青 10B 3/6 dull blue	こい青 2.5PB 3/8 deep blue	暗い青 5PB 3/8 dark blue	にぶ青 10B 3/6 dull blue	うす青 10B 6/6 pale blue
裏布	柄と色		縞と 浅黄無地	茶の細縞	茶の細縞	縞無地	縞無地	浅黄無地

重ねた布の枚数は2枚から5枚と厚い。特に身頃上部に布を厚く重ねたものもある。

布の厚さは厚い部分を記入したが、2mm前後、重さも1000g前後であった。

織り柄はほとんど全体に大小の緋柄を組み合わせ

構成している。一見して型染を思わせる柄もいくつかあるが、資料1の袖以外は、技巧的な緋である。おしやれ着用の型染の雰囲気仕事を仕事着にとり入れようとしたのであろうか。各資料の緋の種類(タテ・ヨコ緋、ヨコ緋)や大きさを〔表2〕に示した。

染め色等については、表布は何枚かの布がはぎ合わされているが、いずれも紺系統の色の濃淡に統一されている。各資料の基本的な地色は〔表2〕の通りである。いずれも色が若干さめている。藍染の布（資料1, 5などに）もみられるが、資料2, 3, 4のように合成染料の紺色の退色したものもある。模様は初めは白色だったものだが、いずれもやや変色して灰白〔N9（grayish white）〕ほどになっている。

裏布の色には種々あるが、資料1, 5は藍染による浅黄の手織木綿、資料4は力織機布らしい藍染、資料2, 3は合成染料による茶染の細縞などが用いてある。

(2) 縫い糸の材質と色、刺し方

縫い糸は右捻りの黒、白の木綿糸、刺し糸は右捻りの白木綿糸2本どり、針目や間隔は〔表3〕に示した。刺し方は表面は図の通りの小さい刺し糸がわずかに出ているだけのため、一見して刺子であることを思わ

表3 縫い糸の捻りや色と刺し方、縫い方

資料番号 (標本番号)		3-1 (32039)	3-2 (32040)	3-3 (32041)	3-4 (32042)	3-5 (32043)		
刺し糸と刺し目	色	白	白	白	白	白		
	捻り	S	S	S	S	S		
	本数	2	2	2	2	2		
	針目	縦方向 針目/10cm 横方向 本/10cm	10 17	14.5 31	12 29	15 32	14 40	
縫い糸と縫い目	色	黒	白・黒	黒	白	黒		
	捻り	S	S	S	S	S		
	本数	2	1	2	2	1-2		
	縫い目 針目/10cm	背・脇 袖つけ	合わせ縫い	9	12	12	7	8
			伏せ縫い	-	4-5	4-5	-	-
へりとり布の幅 (cm)	袖口 裾 衿下	合わせ縫い	8	10	13	袷仕立て	7-8	
		伏せ縫い	-	-	6		-	
		袖口	1	1.2	1	カフス1.7	1.2	
		裾	0.8	-	-	-	1.2	
		衿下	-	-	-	-	-	

せないが、裏をみると一面に大針の刺し糸が縦〔11針目/10cm〕位、横に〔15本/10cm〕などの間隔でびっしり刺されている。資料5などはその細かい刺子の上にさらに古手の緋布を一枚をあてて、そしてまた刺し子をしている。即ちここでの刺子は東北の地方の刺子と異なり、あくまでも生地を丈夫にするためのものであり、したがって表面装飾は刺子模様によってではなく、染柄や織柄に工夫をこらすことによって成っている。

もっともそれとは別に、資料4, 5の通し衿の裾の部分には、身頃の刺子とは異なり、はっきりと装飾性を意図した刺子模様や、水色系の刺縞などがほどこしてある。

c. 縫い方、裁ち方

縫い方、縫い代は図、縫い糸や縫い目は〔表3〕の通りである。袖に刺子がなく、袷仕立てになっている。資料4は袖つけも袷仕立てにつけられていることがこれまでと異なる。資料2は表布の布幅が広すぎるため、

背縫いなどの縫い代の余分な布をさらに折り込んで折り伏せぐけで始末している。資料4はあげがしてあるが、左身頃下は特に右よりも5cmも短くあげてある。足さばきをよくするためであろう。

裁ち方は、各身頃の長さに合わせて刺子布の土台をつくり、その上に短い布を重ねあげて刺したものであろう。さらに余った布は前述のように肩部分にあてて補強している。

長さの不揃いも、たまたま手に入った布の丈を切らずにそのまま用いたものかもしれない。したがって総用布などを記すことはあまり意味がないが、その様子を裁ち方推定図に示した。

資料6 (品名) 刺子上衣

(標本番号) H 62053 (衣類G-5-2)

資料7 (品名) 刺子仕事着

(標本番号) H 62055 (衣類G-5-2)

これらの2資料は、大阪の商店から購入したもので収集記録がない。ただ備考欄に、いずれも三国地方刺子とあり、福井県のものかもしれない。

袖は前の資料1, 2, 3, 4, 5と同様に拾仕立てであるが、長着の仕立てと同様、裏に袖口布がつき、出ぶきになっている。身頃と、その袖の表布側にも刺子のある華麗な総刺子である。附票にはかつての所蔵者の収蔵番号があるから、ある程度数を揃えて収集されたものかもしれない。類似の刺子を他でみたこともある。

資料6の上衣は第1報<sup>2)</sup>の資料3と同様に上衣である。うわ衣の意であろうが、あまり妥当な名とは思われない。資料7は仕事着とある。形態分類からみれば漁村用ドンザと同形であるが、これは家の中で着る衣服のようで、機能性よりも装飾性をたのしんだものと思われる。

資料7の身頃は広幅布の一枚仕立てで、この2資料は、単物あり、袷あり、刺子ありと三種の仕立て方を折衷的にとり入れた衣服で比較的新しい時代のものと思われる。今日の刺子の流行と思えば過渡期のものといえるかもしれない。

資料7の袖口には黒糸で粗いしつけがかけられており、いたみもなくあまり着用された形跡はないが、衿の内側などにシミが少しある。資料6は腰部分にあげをした折り目のあとがある。裏側をみると、そのあげのあった部分の浅黄染の色が、くっきりと退色せずにのこっている。

#### a. 形状

2資料とも巻袖の丈長の衣服で、形状は袖が資料7の方がやや大きい以外は似たような型であるが、資料6は長着型、資料7は別衿つき襦袢型であり、形態分類上は大きく分かれる。

刺し模様はすくいざしで表現しており、資料6は装飾的な総模様の刺子衣で、掛け衿に刺しはないが、肩当て部分には細かい刺子模様があり、本来、仕事着用を意図する刺子衣であることをあらわしている。表、裏とも紺や浅黄の、いたみの少ない布を用いている。

資料7の刺し模様は、袖と衿だけで、肩当て部分に簡単な縦刺しがある。身頃の布が帆布を紺染めにしたものであることが異例である。刺しをする代りに丈夫な生地を考えたのであろうか。二者は晴衣用と普段着用の1組というおもむきである。

#### b. 材料

##### (1) 織布の素材と染め色

素材はすべて平織り木綿布である。表布に織り柄や染め柄はなく、色はすべて紺から黒の無地である。

資料6の表地は紺〔2.5PB 2/3 (dark greyish blue)〕、糸密度は経〔22本/cm〕、緯〔20本/cm〕、裏布は藍染のうすい浅黄〔2.5PB 6/3 (light greenish blue)〕、経〔19本/cm〕、緯〔17本/cm〕で、これは織り糸に粗密があり、手織り布と思われる。衿とへりとり布は、黒〔N1 (black)〕で経緯とも〔23本/cm〕の糸密度である。

資料7は袖、掛け衿が灰黒〔N2 (grayish black)〕糸密度は経〔23本/cm〕、緯〔22本/cm〕で、衿とへりとり布は灰黒〔N2 (grayish black)〕などである。身頃の帆布はかなりあざやかな暗い青〔5PB 3/8 (dark blue)〕で、糸密度は経〔23本/cm〕、緯〔22本/cm〕、袖裏の綿布は古い布で、布幅の不足分を浴衣地で補っている。

資料6の布の厚さは2枚重ねの身頃、袖が1.2mm、衿4.7mm、へりとり3mm、重さは約1000gである。資料7の布の厚さは、身頃1.3mm、袖1mm、衿4.6mm、へりとり2.7mm、重さは約1000gであった。

##### (2) 縫い糸の材質と色、刺し模様

縫い糸は、いずれも右捻りで、資料6は黒木綿糸、資料7は紺と黒の木綿糸である。紺木綿糸は藍染と思われる。刺しの木綿糸も藍染かと思われる。糸が1本どりで細かい刺縫いのためか、色がはげで濃淡ができて、それがまた一つの趣きをそえている。

刺し方は、資料6はすくい刺しで、刺し糸が布の織糸を、一本一本すくって模様を出している。したがって、表面に一本の糸が模様を描いておかれており、裏面には、織り糸一本をすくった小さい針目がかすかにみえているだけである。針目は〔55~60針目/10cm〕ときわめて細かい。

刺し模様は、身頃と袖で異なり、袖は表布一枚だけに刺してあり、裏の浅黄布は、あとから拾仕立てに縫ってあり、刺子が形式化して装飾化したもので、伝統的技術の変化の様子がみられる。肩当て、衿肩明きの周辺部分には、必要以上とも思えるほどの細かい刺子がすくい刺しで厚々と刺されている。資料7は資料6と技法は似ているが、すべて簡略に仕上げている。身頃は前述のように丈夫な帆布を用いて刺しに代えているが、袖はすくい刺しの手抜きをしたような細かい刺子となっている。刺し目は〔40~45針目/10cm〕である。資料6と同様、裏布1枚だけに刺して裏布を拾仕立てにつけてある。掛け衿には、1枚衿の上に附図のような模様ですくい刺しがしてあるが、肩当て部分に簡略

な縦刺しだけであった。

c. 縫い方と裁ち方

縫い方は、刺子衣の仕立て方の定石通りに衿下から裾まわりに、資料7の単仕立てのものにまで、(地厚のためもあるが)へりとり布をつけてあるが、前述のように、袖のみが、衿仕立てで、袖口は、裏に袖口布をつけ0.2cmほどのふきを表に出すという、折衷的な形式である。

袖はいずれも巻袖であるが、資料6は図にみられるように、巻袖を無理なほどに変形させて、袖付け側を短くして、袖全体を小ぶりに仕立てている。表布は布端まで丁寧に刺子がしてあるため、(衿布も含め)余分な端布が部厚く重なって、あまり仕事着むきとはいえない。

縫い方については、資料6は丁寧に、資料7の方はかなり粗雑である。衿付け、袖付けとも糸は2本どりで背、脇〔8～9針目/10cm〕の合わせ縫いのあと、〔4針目/10cm〕の伏せ縫いをして、衿はさらにその布端を耳ぐけでとめてある。へりどりの始末は、1本どりで〔6針目/10cm〕で三つ折りぐけ、衿の始末は一本どりで〔4針目/10cm〕で本ぐけしてある。糸は黒糸であるが、資料7の背、脇、へりとりは、浅黄糸でいずれも資料6よりやや粗い、なお、資料7の背の中央は広幅もののためうになっており、つまみ縫いがしてある。

裁ち方では広幅布を用いているところが画期的といえよう。布幅は、資料6は、表布33.5cm、裏布32.5cm、資料7は62cm、総用布丈は、資料6は衿付きのため約750cmとはぎのない衿布約175cm、資料7には衿がなく広幅のため約405cmと少ない。

要 約

1. 資料についての情報

(1) ここであつかう刺子衣資料は、被覆部位はいずれも軀幹部であり、分類では襦袢型6点と長着型1点(いずれも一部式)の7点である。

(2) 採集は、7点とも京都や大阪の専門業者から入手したものである。

(3) 呼称は、野良着が5点と、刺子上衣、刺子仕事着が1点ずつである。

2. 資料の分析

a. 形状

(1) 本資料の構成要素は、6点が身頃、袖、衿から成り、1点だけが身頃、袖、衿、衿から成っている。

(2) 衿は、本衿襦袢型が2点、かげ衿型が3点、

別衿襦袢型が1点、長着衿型が1点である。掛け衿は3点あった。

(3) 袖は、巻袖が6点、野良着の1点だけが舟底袖である。

(4) 馬のりは、7点とも無い。

(5) つけ紐も、7点とも無い。

(6) 資料の寸法

① 丈については、最少値99cm、最大値122cmである。

② 衿丈は、最少値58.5cm、最大値62.5cmである。

b. 材料

(1) 織布の材質と柄、染め色

① 素材はいずれも木綿布であり、組織は平織りが大半であるが、衿に朱子織の布を使ったものが野良着に3点ある。

② 表布の糸密度は、経糸は〔19本/cm〕から〔32本/cm〕まで、緯糸は〔17本/cm〕から〔27本/cm〕までである。

③ 布の厚さは、1mmから7.7mmである。

④ 合わせ布の枚数は、2枚から5枚であるが、多く重ねたものが多い。ただし1点、帆布のため1枚だけのものもあった。

⑤ 布の重さは、760g～1560gである。

⑥ 表布の柄模様は、紺地に小・中緋、草花緋などの緋が多く4点、紺地の緋と型染が1点、青無地と紺無地が1点ずつであった。

なお表布は2種類用いたもの5点、3種類2点である。

⑦ 裏布は、縹、浅黄の無地のもの3点、茶の細縞のもの2点、縞と無地のもの1点、裏地のないもの1点である。

(2) 刺子糸、縫い糸の材質と色

① 刺子糸、縫い糸いずれも木綿糸であるが、両者は必ずしも同じ糸ではない。

② 刺子糸は、いずれも右撚りであり、縫い糸もいずれも右撚りである。

③ 刺し糸の色は、野良着は5点とも白であり他の2点は藍色である。刺すために用いる糸の本数は1本どりは2点、2本どりが5点である。

④ 縫い糸は、黒糸と白糸を併用したもの4点、黒糸のみ2点、黒糸と紺糸のもの1点と、度重なる補修の様子がかがえる。

⑤ 刺し方は、縦刺しが野良着の5点、他の比較的新しい時代のもと思われる衣類である2点は、すくい刺しで、装飾的な模様刺しである。

針目は、縦刺しは〔10針目/10cm〕から〔15針目/10cm〕で

その間隔は〔17本/10cm〕から〔40本/10cm〕と細かい。すくい刺しの針目は〔40針目/10cm〕から〔60針目/10cm〕である。

b. 縫い方と裁ち方

(1) 縫い方

① 縫い方は、合わせ縫いだけで縫ってあるものは3点、合わせ縫いと伏せ縫いを用いたもの4点である。その縫い目は、合わせ縫いは〔7針目/10cm〕から〔12針目/10cm〕であり、伏せ縫いは〔4針目/10cm〕から〔8針目/10cm〕であった。

② へり通りの様子は、袖だけのものは野良着の5点であり、袖、衿下、裾にあるものは2点である。

(2) 裁ち方

① 布幅は、6点が33cmから35cmで、1点が62cmで、これは広幅物の帆布である。

② 表布の用尺は、広幅布のものは並幅の袖、衿を入れても480cmと少なく、襦袢型の5資料は550～680cm、一部式の衣類にしては用尺が少ない。衿つきのもものは750cmであった。

析をともなう日本在来の労働衣服の比較研究」の成果の一部である。

御指導いただきました共同研究の代表者の中村俊亀智教授（国立民族学博物館）、ならびに西村綏子教授（岡山大学）をはじめとする他の共同研究員の方々、さらには資料の利用に御協力下さいました国立民族学博物館情報管理施設の方々に、心から御礼申し上げます。

文 献

- 1) 山崎光子；農作業着型（二部式）刺子資料の分析—国立民族学博物館収蔵標本による(2)—。県立新潟女子短期大学紀要，No21，（1984）。
- 2) 山崎光子；防寒着型（二部式）刺子資料の分析—国立民族学博物館収蔵標本による(1)—。県立新潟女子短期大学紀要，No 21，（1984）。
- 3) 山崎光子；国立民族学博物館収蔵の労働衣服—とくに刺子の形態・染織の分析—。国立民族学博物館研究報告，5（3），778～780，1980。

謝 辞

この報告は国立民族学博物館の共同研究「非破壊分



1.



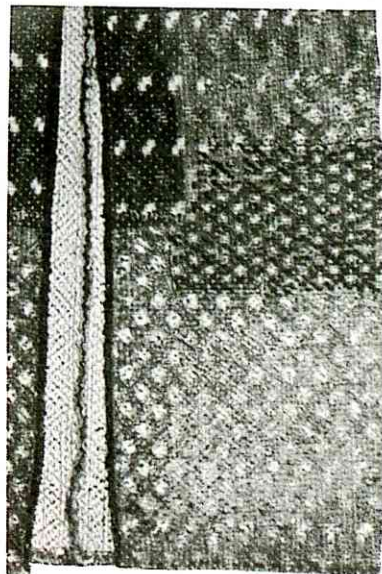
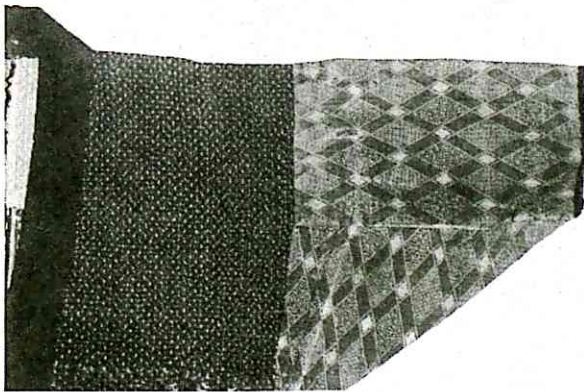
2



3



4



5

写真1

資料3-1 野良着

1. 表, 前面
2. 表, 後面
3. 裏, 前面
4. 裏, 後面
5. 部分の拡大



1



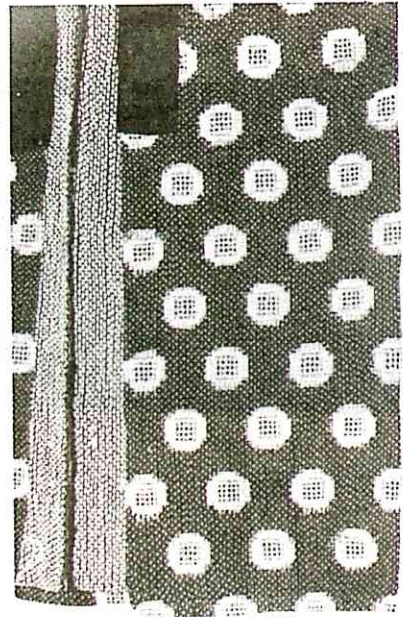
2



3



4



5

写真 2

資料 3-2 野良着

1. 表, 前面
2. 表, 後面
3. 裏, 前面
4. 裏, 後面
5. 部分の拡大





1



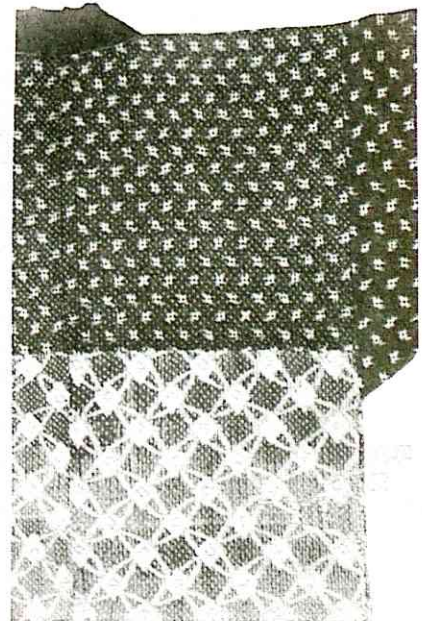
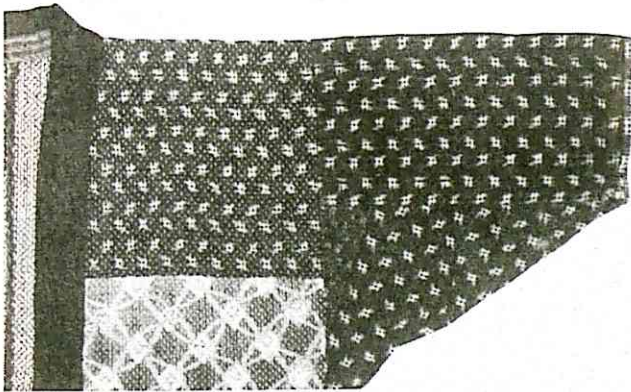
2



3



4



5

写真 3

資料 3-3 野良着

1. 表, 前面
2. 表, 後面
3. 裏, 前面
4. 裏, 後面
5. 部分の拡大



1



2



3



4



5

写真4

資料3-4 野良着

1. 表, 前面
2. 表, 後面
3. 裏, 前面
4. 裏, 後面
5. 部分の拡大



1



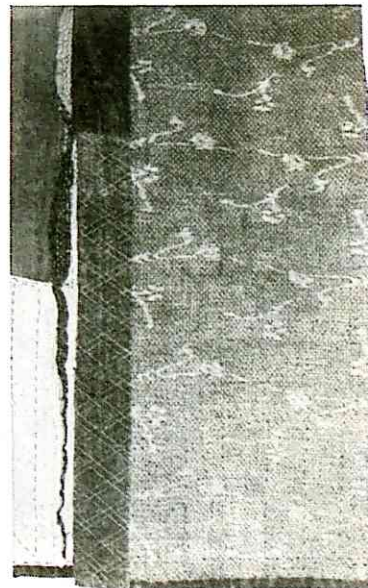
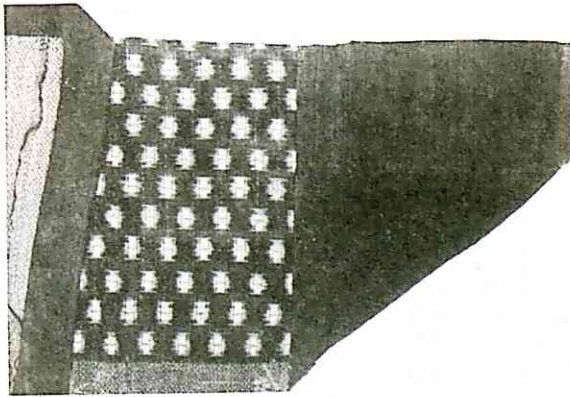
2



3



4



5

写真 5

資料 3-5 野良着

1. 表, 前面
2. 表, 後面
3. 裏, 前面
4. 裏, 後面
5. 部分の拡大



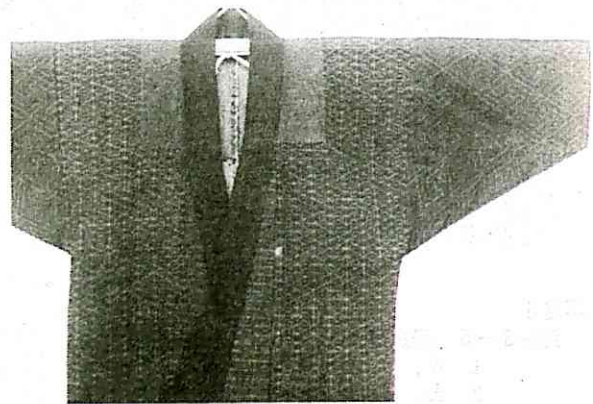
1



2



3



4

写真6

- 資料3-6 刺子上衣  
1. 表, 前面  
2. 表, 後面  
3. 裏, 前面  
4. 部分の拡大



1

2



3



4

写真7

資料3-7 刺子仕事着

1. 表, 前面
2. 表, 後面
3. 裏, 前面
4. 部分の拡大

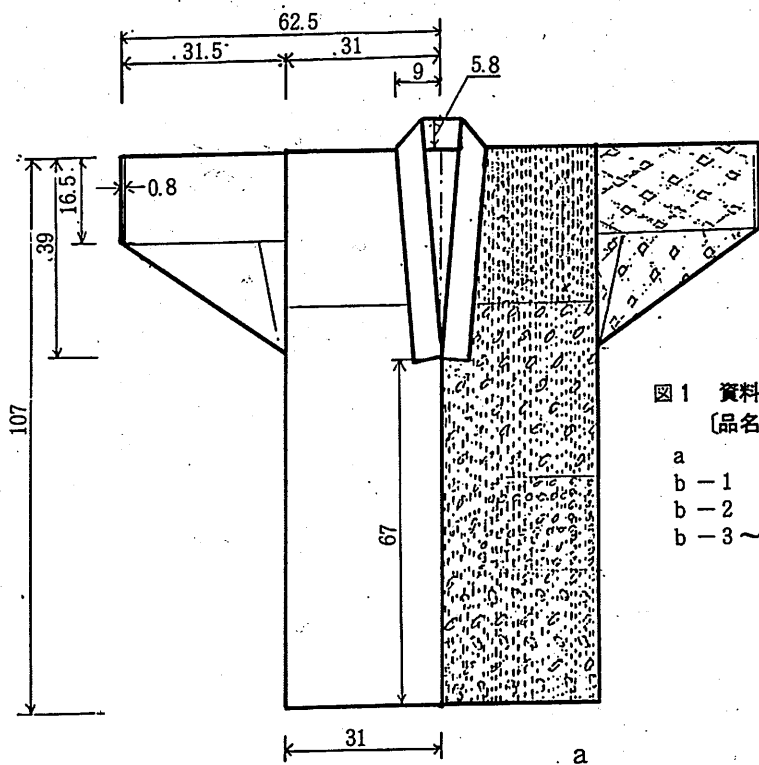
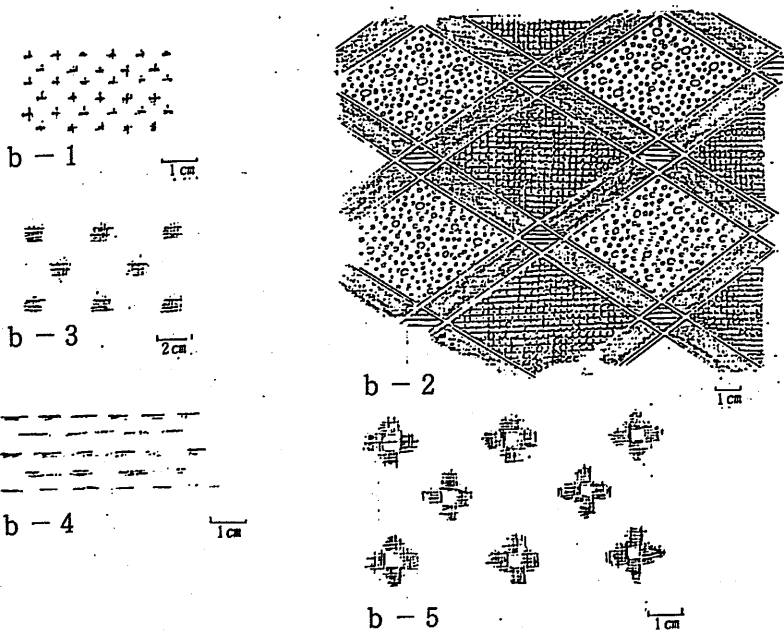


図1 資料3-1

〔品名〕野良着〔標本番号〕H 32039

- a 形状図
- b-1 表布 身頃上部の小拵
- b-2 表布 袖の型染
- b-3~5 表布 身頃下部の拵の  
いろいろ



裾着型（一部式）刺子資料の分析

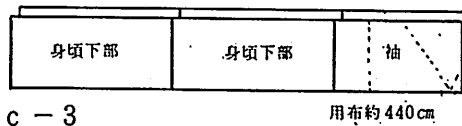
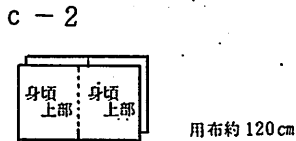
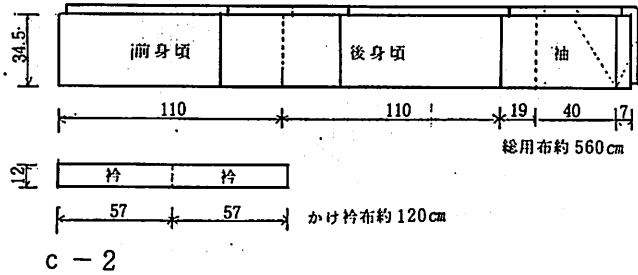
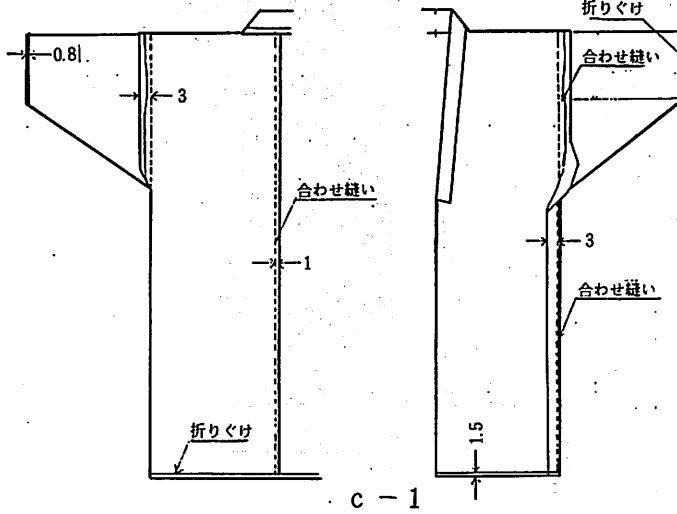
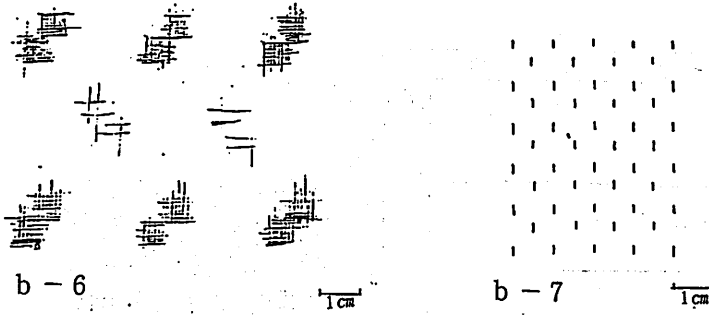


図2 資料3-1 [品名] 野良着  
[標本番号] H 32039

- b-6~7 表布 身頃下部の緋
- c-1 縫い方
- c-2 裁ち方推定図 全体図
- c-3 裁ち方推定図 布別部分図

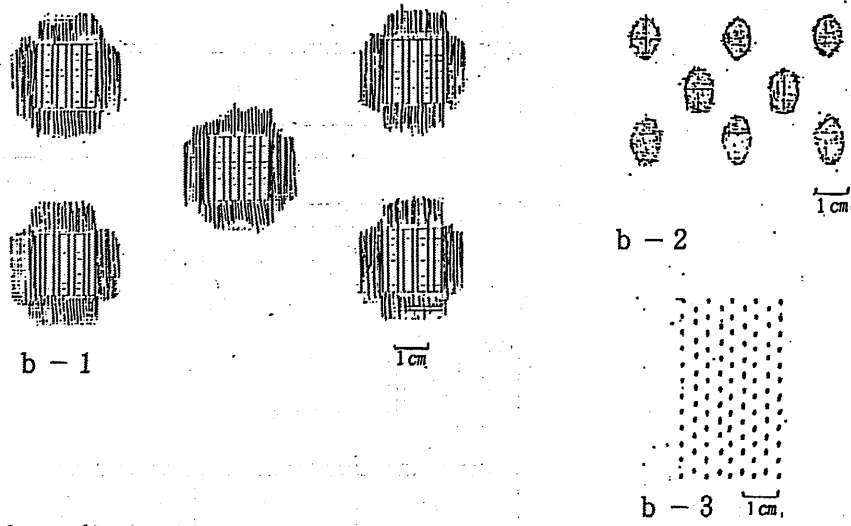
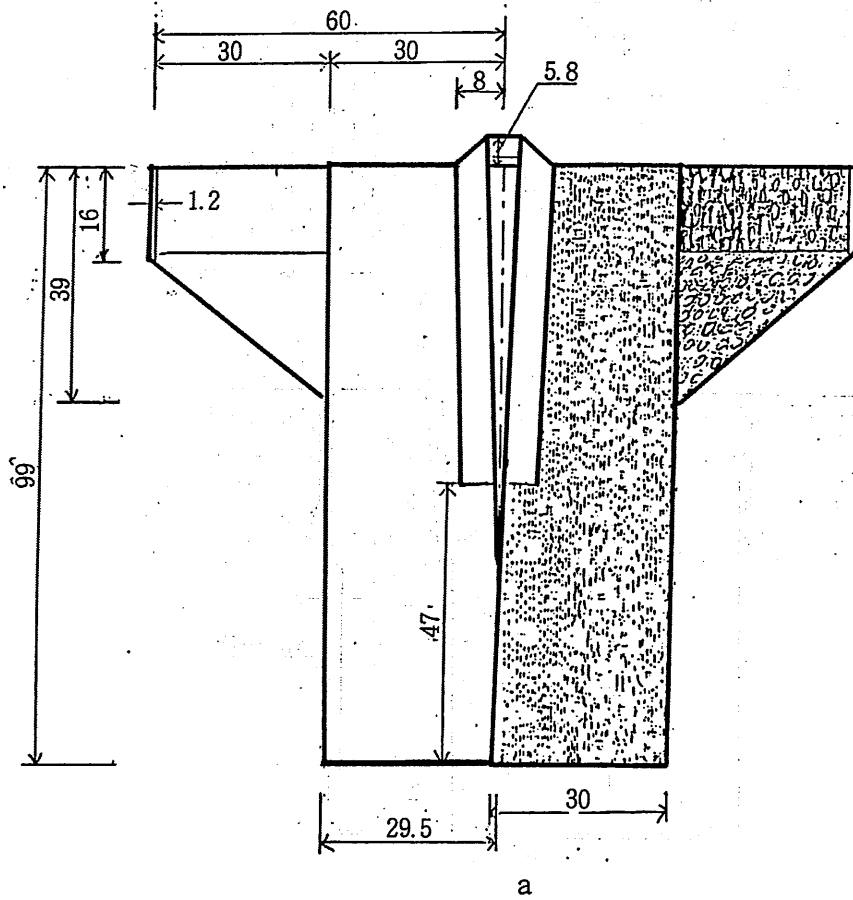
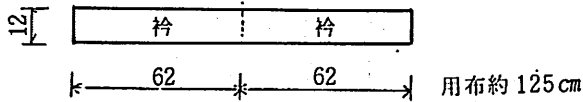
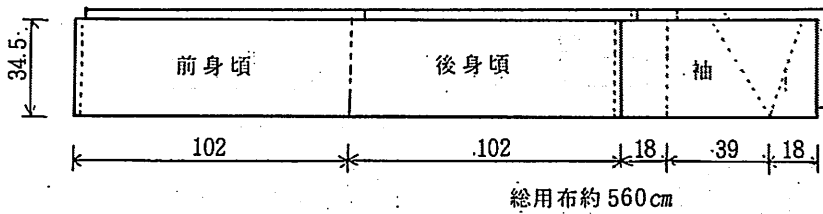
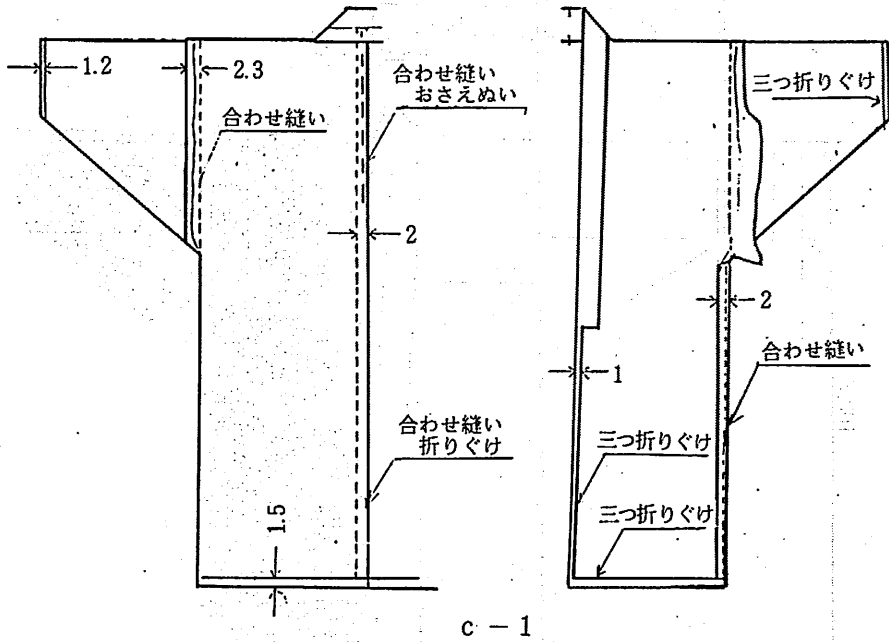


図3 資料3-2 [品名] 野良着 [標本番号] H 32040

- a 形状図
- b-1 表布 身頃の大拵
- b-2 表布 袖の拵
- b-3 刺し方





c - 2

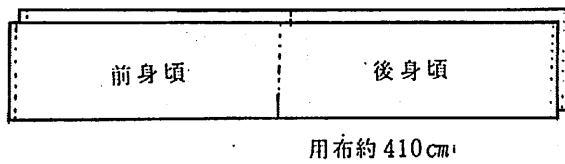
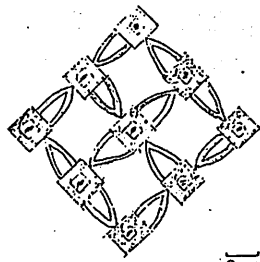
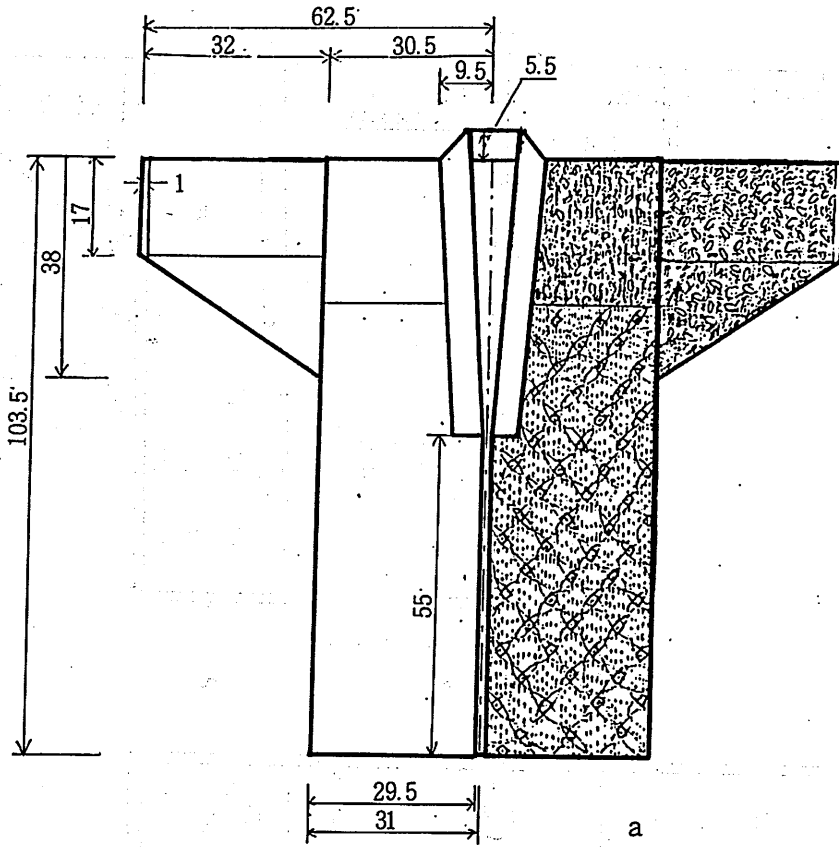
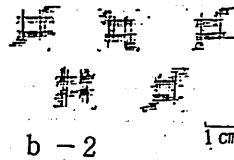


図 4 資料 3 - 2 [品名] 野良着 [標本番号] H 32040

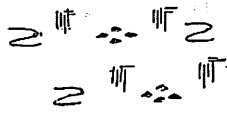
- c - 1 縫い方
- c - 2 裁ち方推定図 全体図
- c - 3 裁ち方推定図 布別部分図



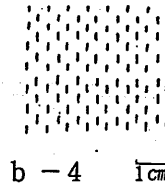
b - 1



b - 2



b - 3



b - 4

図5 資料3-3〔品名〕野良簞〔標本番号〕H 32041

- a 形状図
- b-1 表布 身頃の経緯緋
- b-2 表布 肩, 袖の中緋
- b-3 袖, 足し布の緋
- b-4 刺し方

裾着型（一部式）刺子資料の分析

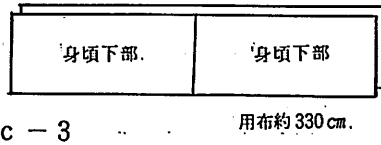
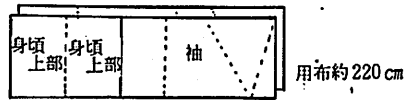
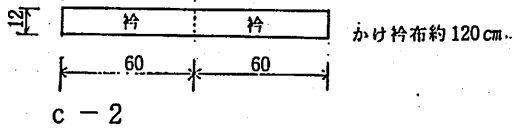
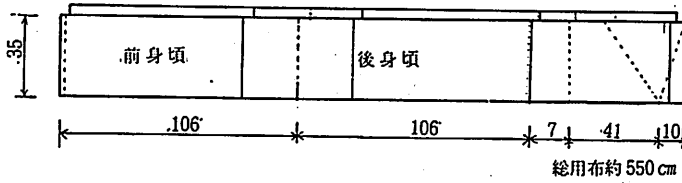
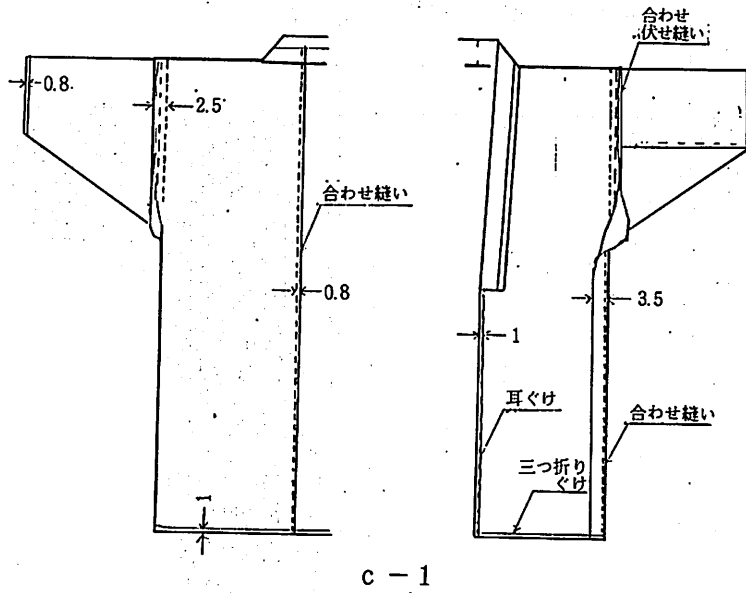


図 6 資料 3 - 3 [品名] 野良着 [標本番号] H 32041

- c - 1 縫い方
- c - 2 裁ち方推定図 全体図
- c - 3 裁ち方推定図 布別部分図

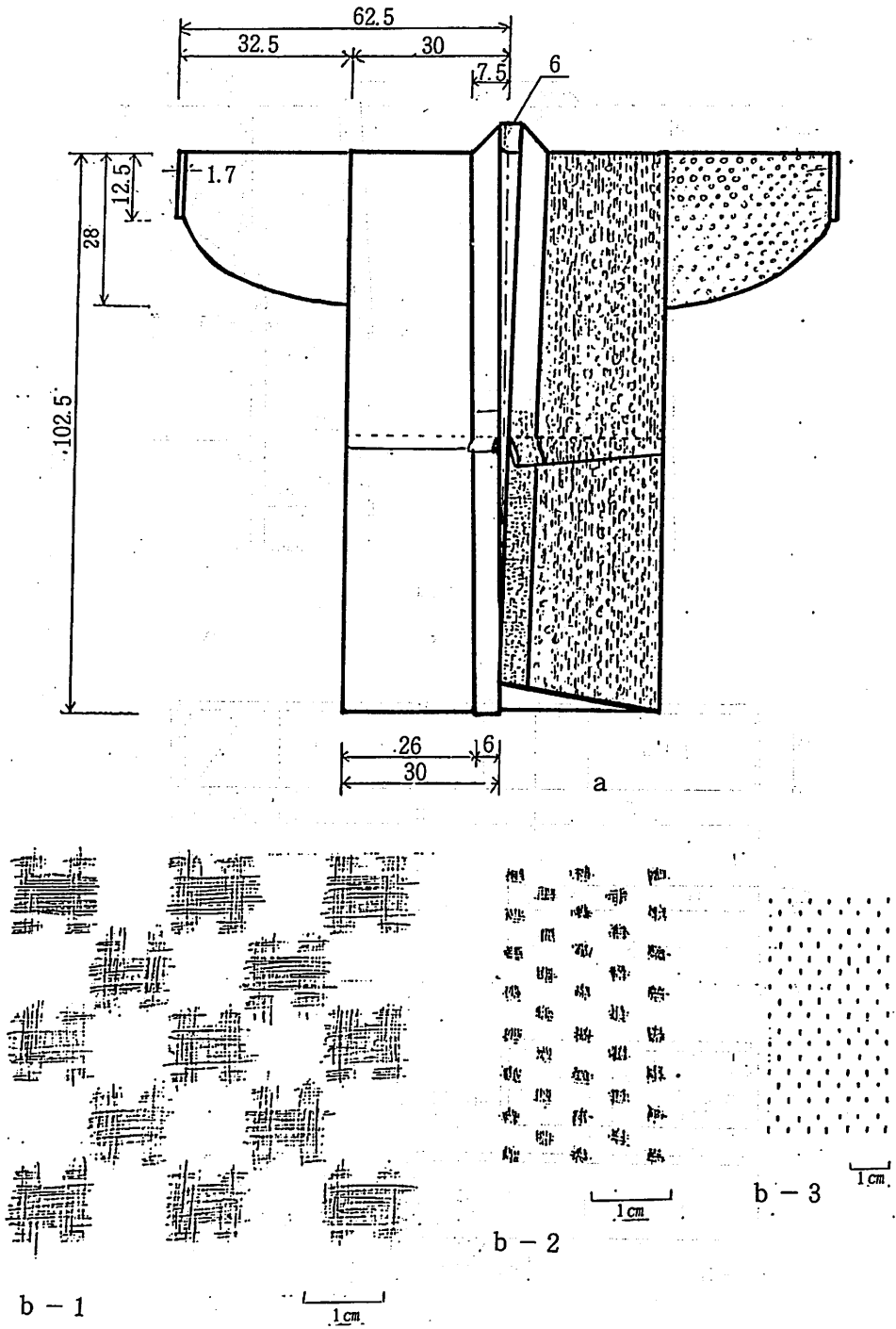


図7 資料3-3 (品名) 野良着 (標本番号) H 32042

- a 形状図
- b-1 表布, 身頃の緋柄
- b-2 表布, 袖の緋柄
- b-3 刺し方

襦袢着型（一部式）刺子資料の分析

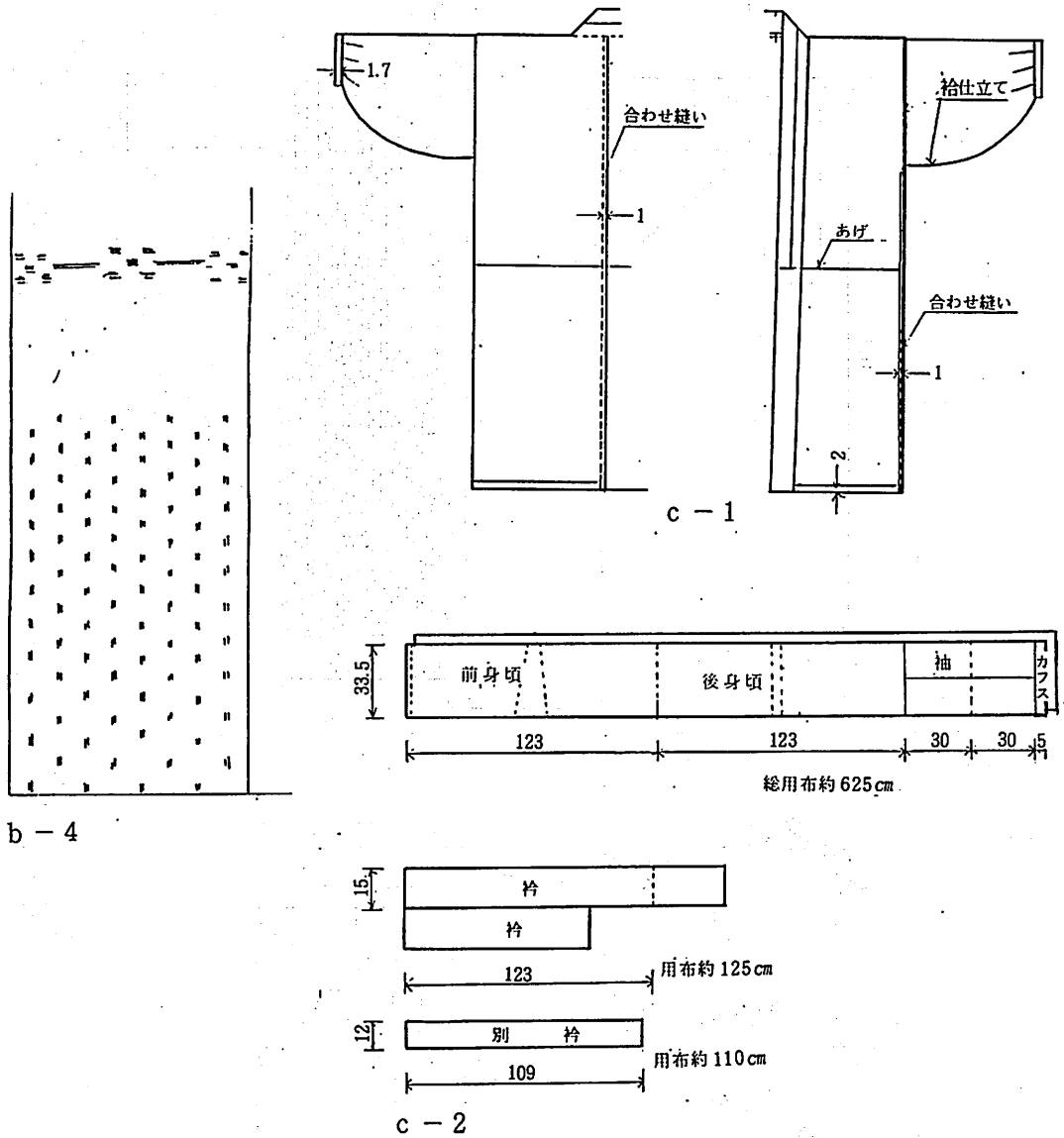


図 8 資料 3 - 4 [品名] 野良着 [標本番号] H 32042

b - 4 衿先の刺し方

c - 1 縫い方

c - 2 裁ち方推定図 全体図

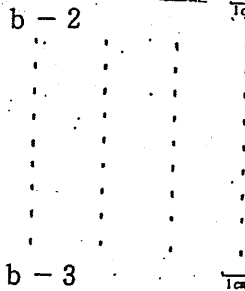
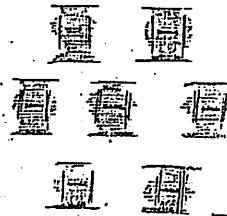
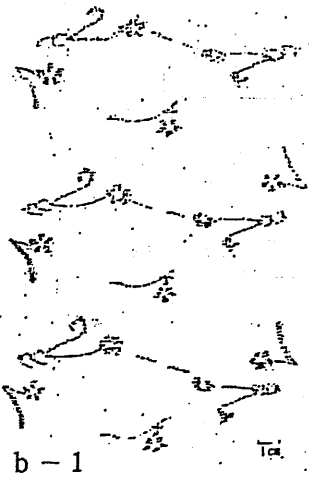
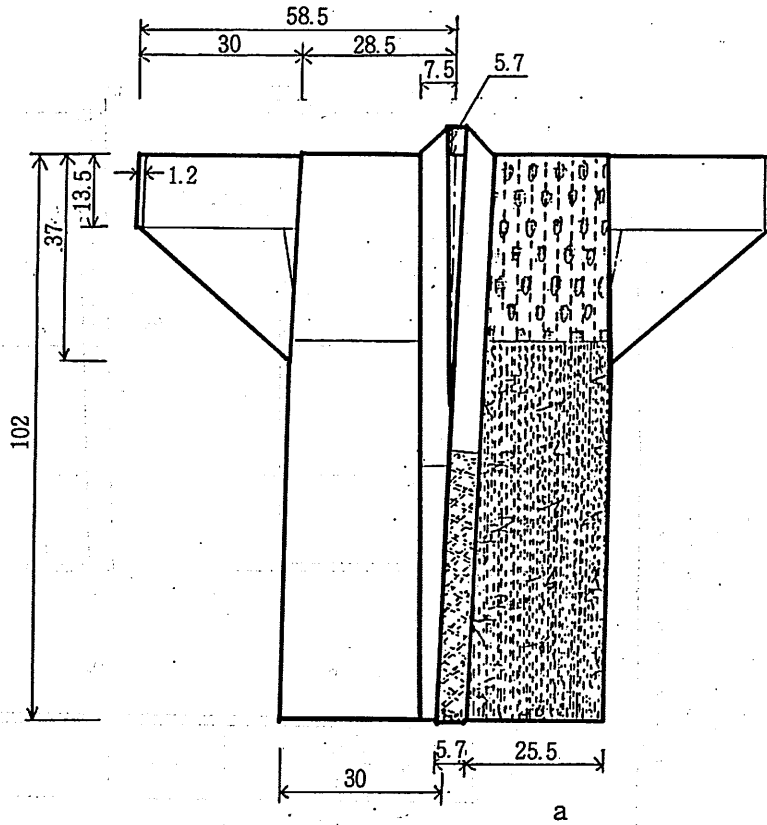


図9 資料3-5 [品名] 野良着  
[標本番号] H 32043

- a 形状図
- b-1 表布, 身頃下部の横縞
- b-2 表布, 肩部分の縞
- b-3 刺し方

襦袢着型（一部式）刺子資料の分析

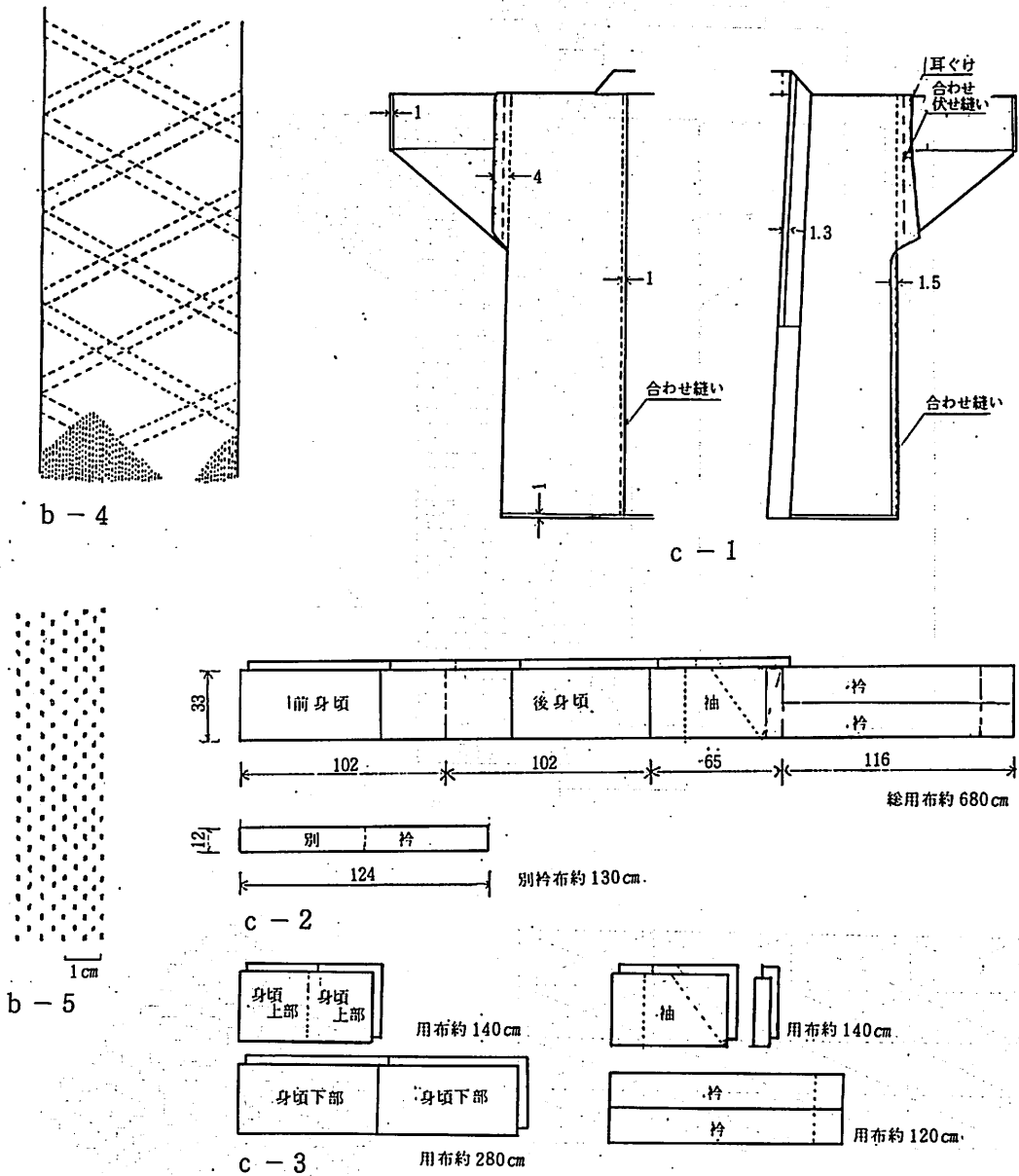


図 10 資料 3-5 [品名] 野良着 [標本番号] H 32043

- b-4 衿先部分の刺し方
- b-5 刺し方
- c-1 縫い方
- c-2 裁ち方推定図 全体図
- c-3 裁ち方推定図 布別部分図

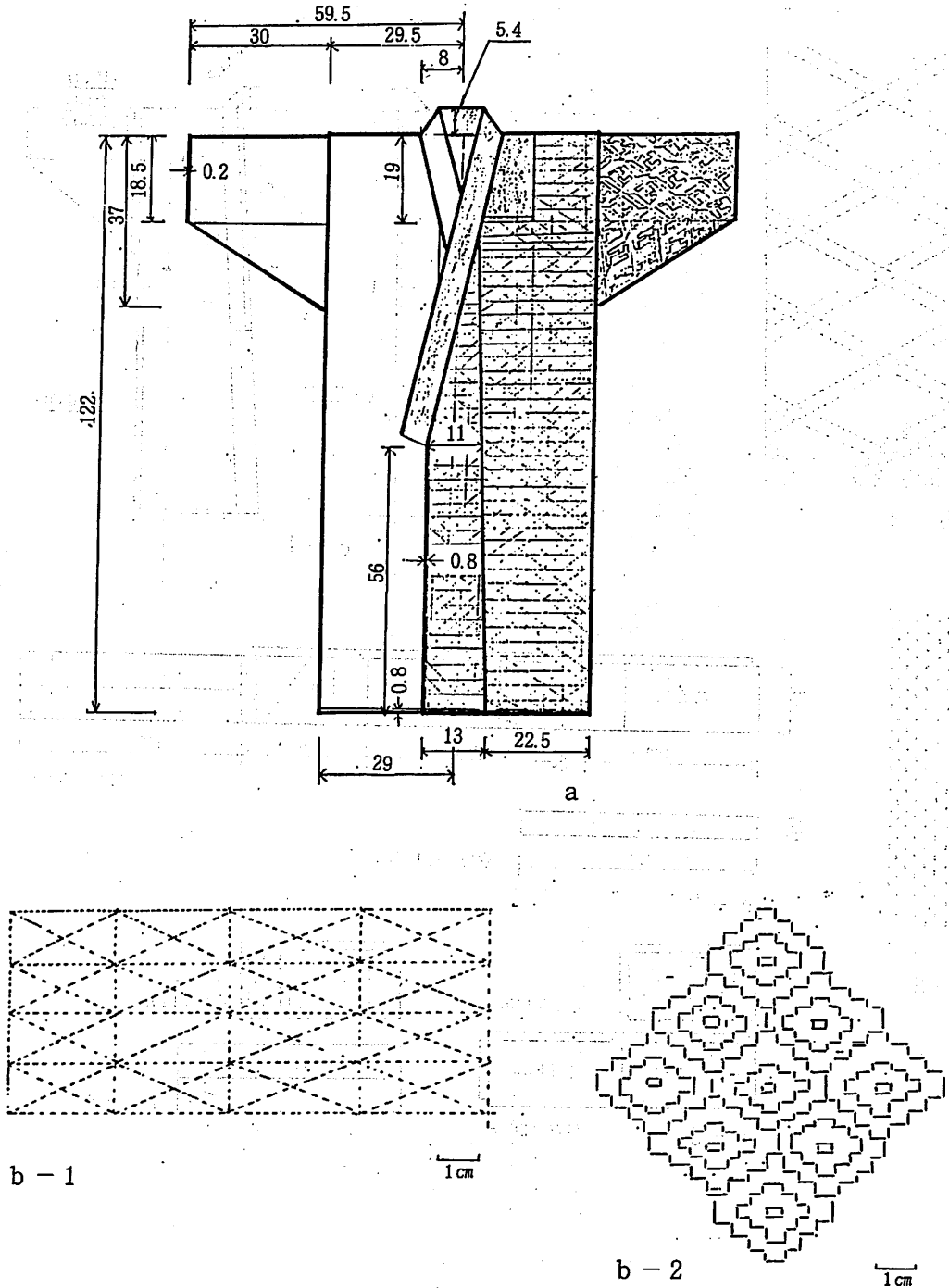


図 11 資料 3 - 6 (品名) 刺子上衣 (標本番号) H 62053

- a 形状図
- b - 1 身頃部分の刺子模様
- b - 2 肩当て部分の刺子模様



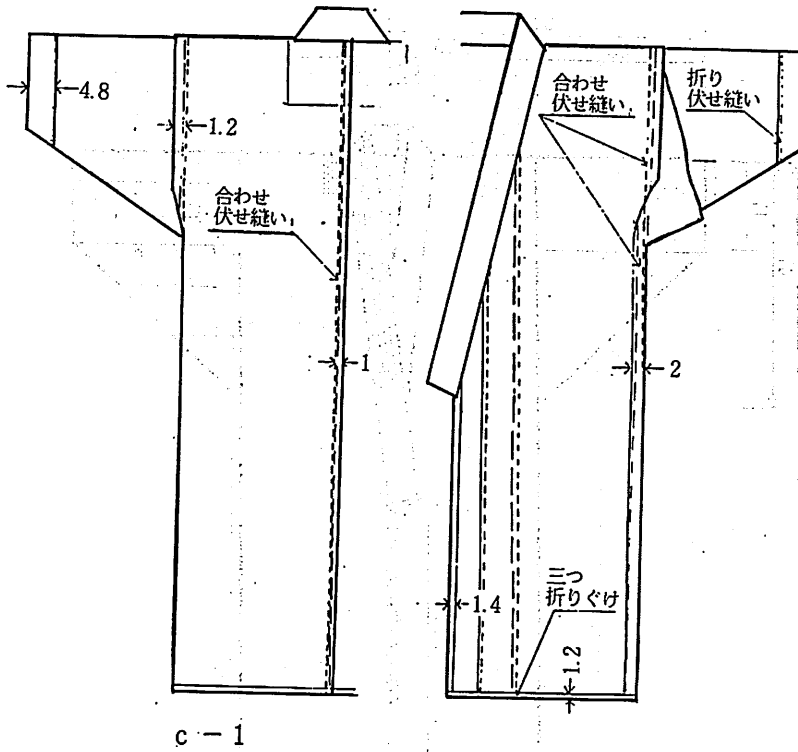
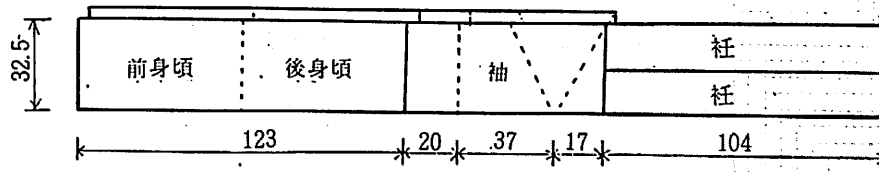
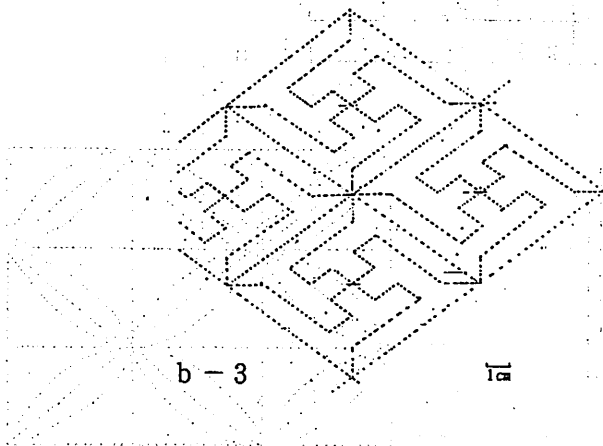
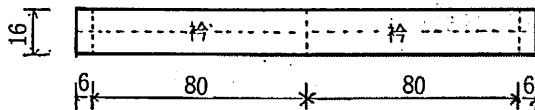


図 12 資料 3 - 6 [品名] 刺子上衣  
 [標本番号] H 62053  
 b - 3 袖の刺子模様  
 c - 1 縫い方  
 c - 2 裁ち方推定図



総用布約 500cm



衿用布約 175cm

c - 2

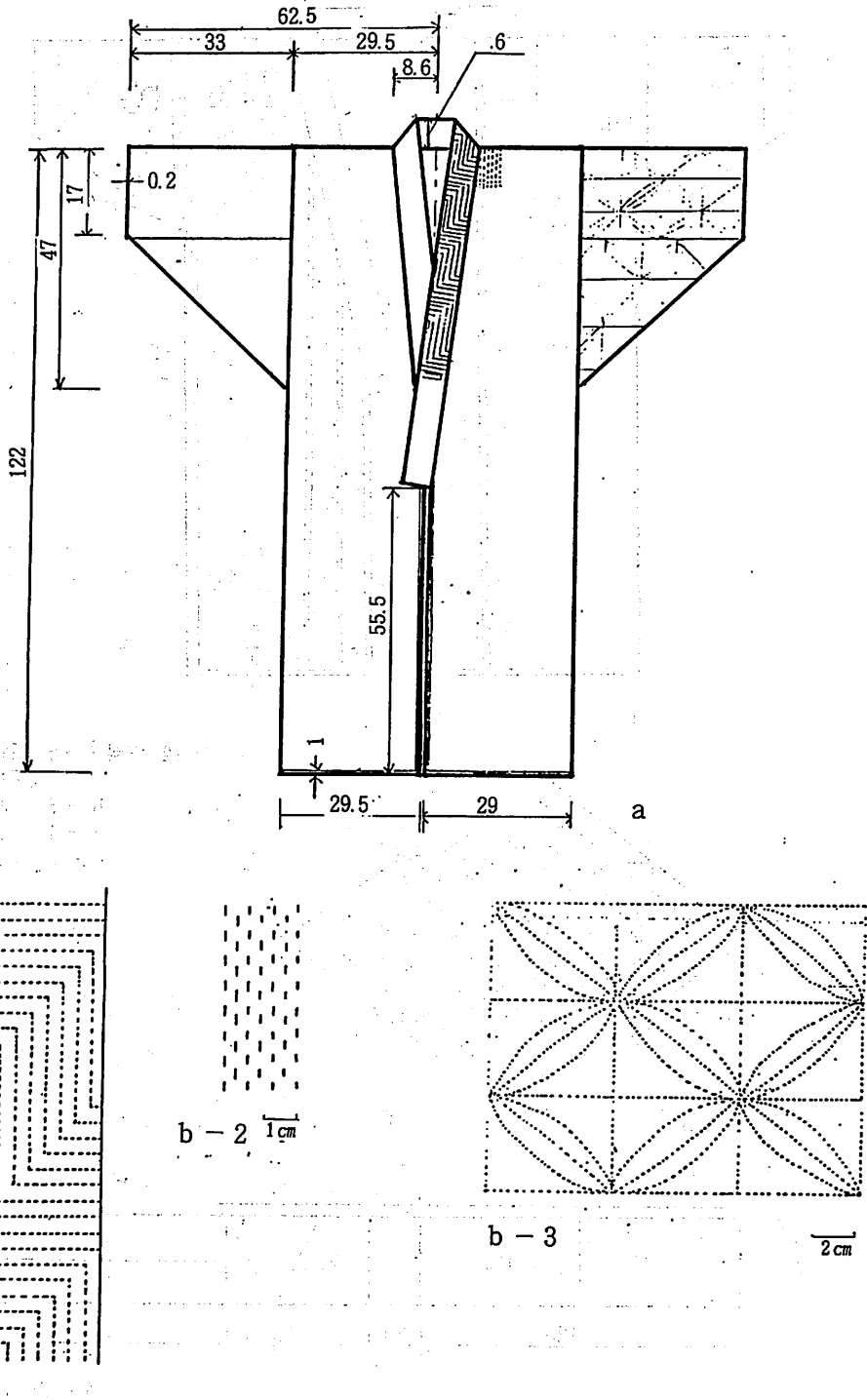


図 13 資料 3 - 7 [品名] 刺子仕事着 [標本番号] H 62055

- a 形状図
- b - 1 掛け衿の刺子模様
- b - 2 肩当て部の刺子模様
- b - 3 袖の刺子模様

襦袢着型（一部式）刺子資料の分析

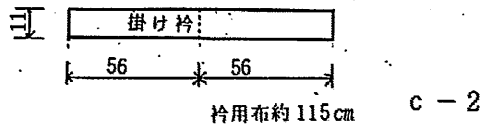
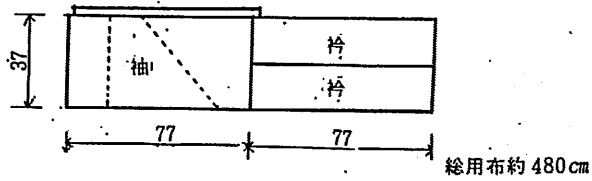
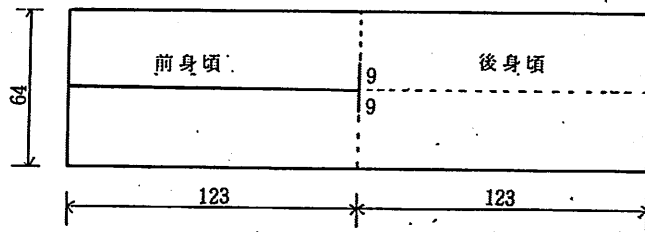
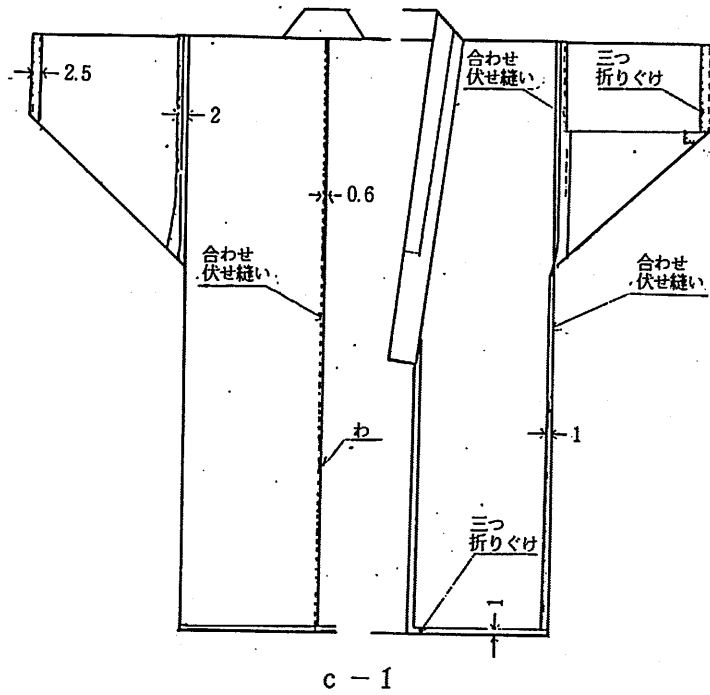


図 14 資料 3-7 (品名) 刺子仕事着 (標本番号) H 62055  
 c-1 縫い方  
 c-2 裁ち方推定図 全体図